

第19回昭和館見学作文コンクール 昭和館特別賞作品

No	学校名	学年	氏名	作品数	入賞
1	江戸川区立下小岩第二小学校	小6	瀬口 武史	1	昭和館特別賞
2	江戸川区立下小岩第二小学校	小6	星 歩夢	1	昭和館特別賞
3	江戸川区立下小岩第二小学校	小6	柳田 慧子	1	昭和館特別賞
4	江戸川区立下小岩第二小学校	小6	関矢 陽向	1	昭和館特別賞
5	東久留米市立東中学校	中2	南野 結	1	昭和館特別賞
6	恵泉女学園中学校	中3	佐野 環	1	昭和館特別賞

昭和館特別賞

過去から未来へ

瀬口 武史

ぼくは昭和館に行つて、今の家族と戦中の
 家族の在り方や生活の変化、食やものなどが
 大きく変化していることは気がつきました。
 今では、考えられないものが、たくさんあつ
 たので、ものすごくおどろきました。その中
 でも、ぼくが取り上げたいのは、今の家族と
 戦中の家族のちがいと戦中の気持ちについて
 と戦後のくらしについてです。

今の家族は、色々な食材を使つた、たくさ
 人の料理を作つてくれて、家族みんなび食
 ることができますが、戦中の家族は、食料が
 全然なく、戦争に行つている人になにか送る
 ため、がまんするしがありませんでした。
 でも一つ変わらないことがあります。それ
 は、人への気持ちです。今の家族は、出かけ
 た人をむかえて家族を大切にすることを
 すると思います。昔の家族も、戦争に行つた人
 々に千人針というお守りを渡していました。

千人針とは、無事を祈って作られたものです。つまり、大切に思っていているということです。このように、今の家族も戦中の家族も、家族の人々を大切に思う気持ちがあり、それは、今になっても変わらないという事です。

戦後は、食材が戦争中よりもさらに不足し、闇市というところび買っていました。闇市で売っているものは、基準価格の何十倍にもなっています。ものがたくさんありました。最低でも十二倍、最高で二百六十四倍になっています。

強く立ち上がったいきましました。

ぼくは昔のようなくらし方では、考えられないことがたくさんあり、おどろきました。でも、家族みんなを思う気持ちは、今も変わらないうことばかりでした。なので、これからも家族を思う気持ちは大切にしていきたい。この先どうなっていくのかを考え、家族をずっと大切にしていきたいと思いました。

これからの行動として、家族に悩みがあるの

昭和館特別賞

戦争の恐ろしさ

星 歩夢

「戦争は、ぼくには関係ない。」と思つてい

た。しかし、社会科見学で昭和館に行き、戦

争のことが昔の暮らしについて学んだことで、

それが違つてゐることに気がいた。

館内を案内してくれた方によると、当時の

暮らしは大変だつたという。ぼくはその中で

も、食糧不足について調べてみた。食糧は、

配給制になつて、一世帯の人数によつて量が

決まつていた。館内には、日の丸弁当、すい

とん、シチュー、といった昔の食事を表現して

いるものがあつた。その中には、大豆やサツ

マイモがたくさん入つていた。それがなぜな

のか気になつたので、家び調べた結果、食糧

不足でもエネルギーを摂取しがいからだと

分かつた。けれども少量しか食べられな

ないので、つうか、たと思つた。

この頃日本は、食糧不足に陥つてお

り、そ

れはものすごく深刻な状態だつた。だから、

それを補うため、戦時農園講義録という空き
 地を利用した畑作りや雑穀で食べる昆虫
 の食バ方を紹介した。みんな、昆虫を食べる
 のは嫌だろうけど、昆虫を食わなくてはなら
 ないぐらゐ食糧不足であつたのである。その
 時、学校では、コッパパンと脱脂粉乳という
 生乳や牛乳または、特別牛乳から、脂肪分と
 ほぼ全ての水分を除去したものが給食に出さ
 れていた。これは、ララ（LARA）という
 アジア救済連盟からの救済物資を利用したも
 のである。今は、毎日違う給食が出されてい
 るが、毎日給食が同じだと、食べる楽しみが
 なくなつてしまつていたと思う。数日ではあ
 るが、ぼくにも同じ様なことがあつた。五年
 生の時、夕食で、一週間の内に、二度も同じ
 料理を食べたのである。二度目は、夕食が同
 い料理であると同じ。あまり、食欲があか
 なかつた。もし自分がそのとろに生まれてい
 たら、うらやみにたえり来ていなかつたらう。
 今と昔では、色々なことが違つていゝ。戦

争があなたに与えた影響は大きく、多く命を落とす
 ことになり、もしも。それに加え、食糧
 不足が、とても深刻だ。たのびある。戦争がも
 たらした影響には、後悔することしかできな
 い。今こうして考え、おめると、とても恐ろし
 い。自分がこうして、毎日美味しい料理を食
 べ、幸せに暮らしていることは、当たり前では
 ない。今もなお、世界のどこかで戦争が起き
 ている。その戦争が、この世からなくなると、
 平和になることを願う。このように、
 願っているのが、将来のぼくたちの役目だ
 あり、世界の課題だと考える。日本だけでは
 なく、世界が変わらなくてはならない。昭和
 後は、戦争について考えることが、平和
 を目指すき、かけになるかもしれない。その
 点では、昭和後は大切である。ぼくは、今回
 の見学で、戦争は、みんなに関係のあること
 で、危機感を持つべきだと考えた。一度戦争
 について考え、おめると、ほしい。それ木が、
 け、恐ろしいものではないか。

国民と戦争

柳田 慧子

私は、あまり戦争時の国民の生活に興味は
 ない。た。なぜなら、戦争中のことを深く調
 べたから、教科書以上のことを学べるとは
 思、ていなか。たからだ。けれども、昭和館
 に足をふみ入ると私の見る世界が変わ、た。
 大日本帝国憲法の第二十四条にかいてある
 ように、「妻ヲ支配スル」と、男性と女性とは差
 別されていた。私はそれを聞いて、怒りしか

な。た。理由は、長い髪を切り皮をはげば
 皆、赤い血と強い骨がある。皆同じなのに女
 性、差別を受けなければいけなか。たのかと
 思、たからだ。確かに男性のようなかはない。
 けれども男性にはない文学などの能力も、女
 性はも、ている。働く事女性のせいでは出来な
 い、話を聞いてもくれない。そんな中、戦争
 が始ま、た。女性達は千人針を縫い、男性達
 は、国に被害向け戦場に足を運ぶ。そしてこ
 こから女性の見守場を、金属製のものは回収

されるようになるよ、代用品が出てきた。これが女性の知恵だ。アイロンの鉄がためなら、陶製のアイロンの作ればよい。このように女性達は工夫をしてきた。その女性達を糾は、ほこりに思った。

次に私が気になった事は、

子供達の生活と

考え方だ。正直、疎閑生活の初めは楽しか。

たのではないか。私はそう考えた。左様なら、

一人暮らし気分になれるからだ。でも確かに、

幼い子達は泣くだろう。私は今、反抗期中だ。

あの時代は、親に反抗する時間もあつたのだらう。私の印象だが、中学生ぐらいの男子は母親の体調をよく気にするのだけど、今なんて、体調をくざしていても何の感情もあき出ない。そう考えると、その時代の子供達は家族思いなんだなあと考え方のちがいが発見出来る。

「戦争」とい、たら、男性が戦場に行くの

が、代表的だった。けれども、女性も子供も

国民全員が国のために戦っているのだと、照

和館で学んだ。そこから私は考えた。今は昔より戦争が減ってきている。だけど、戦争はいつでもまた起こるかわからない。戦争はえらい人が始めようと言ったら始めるしかない。これからは完全に戦争がなくなる世の中を願う。今の戦争は子供達もいっうを持って戦場へ出ていいる。私はその子供達の人生をすべて戦争で終わらせたくない。そう考え方が変わって、たー日だ、た。

昭和館特別賞

悲しい毎日

関矢 陽向

今年は、新型コロナウイルスの影郷響で社会
 科見学に行かれないかもしれないと先生が言
 いました。ぼくは、昭和館に行くのをとても楽
 しみにしていたので無事に行けて良かったで
 す。なぜこんなにも楽しみにしていたかと言
 うと、昔の道具や服が見れるし、戦争のこと
 も知れるからです。

ぼくが一番見たかったのは、昔の人の食べ
 物です。なぜ食べ物が見たかったかというと昔
 は戦争などがあってたまたま、食べ物はどうして
 いたのかかとても疑問だったからです。ぼく
 は一番興味がありませんでした。ぼくは昔の食べ物
 を見て、「今とはぜんぜんちがう食べ物だ」と
 思いました。そして、昔の人の服も見たら、
 それも今と比べてとてもちがいました。服は
 とてもボロボロでした。でも今と似ている所
 はありました。それは、頭に防災ずきんのお
 うな物をかぶっていたました。やはり昔でも防

びずき人はあつたんだと思ひました。一番お
 どりいたのは残飯ツキエーという食べ物です。
 残飯を食べるなんと信じられませんでした。
 ぼくは、次に戦争について見ました。ぼく
 が戦争について見ている時に見たのは戦時中
 の新聞でした。新聞には、戦争のことについ
 てくわしく書いてありました。新聞には、戦
 争中におきたことなどがくわしく書いてあり
 ました。そしてぼくは、戦後の小学校はどう
 していたのかがとても気になりました。なぜ
 なら戦争でいろいろな所が燃えているから小
 学校も燃えているにちがいないから、どこで
 授業を受けているかがとてもきになつたから
 です。それで、小学校のことについてあつた
 その作品を見たら、とてもびっくりしました。
 やっぱり小学校はなくなつていました。外で
 授業をしている子どもたちはとても悲しそ
 うでした。

首のことがとてもくわしくあれとても良
 かつたです。ぼくがわかつたことは、昔はと

てモッラかつたんだと思ひました。もし今も
こんな戦争がおきたり量が少ないご飯だっ
たら自分だけたられません。昔の人はこんな状
況なのによく生きていられて、すごいと思ひ
ました。昔は、食べ物がたくさん食べられな
かつたけど、今は、たくさん食べられるので、
食べ物に大事なするといふ思ひをして好きそ
らいせず、この人生を生きていきたいです。

昭和館特別賞

南野 結

戦争が教えてくれたこと

南野 結

今まで、教科書・テレビ・ドラマ・映画、
など様々な場面で戦争について取り上げられ
てきた。

学校の文化祭で、私の学年は戦争について
の劇をやった。その劇では「平和な世の
中にするために、今自分は、何か行動にうつ
しているだろうか。」というテーマが
込められていた。

そこで私は、平和とは。戦争とはなんだろ
うか。今、自分に出来ることを探すために、
昭和館に行った。昭和館では、戦時中の生活
が展示されていた。

戦争では、男の人が兵士になり、空襲に備え
て、子供は親と離ればなれにならなければな
らなかつた。生活では、国家総動員法が施行
され、配給制が実施された。食料が不足し、
飢えて七くな。てしまった方もたくさんいた。
展示品の中で、私は、出征兵士を見送るのぼ

りが目に留ま。兵に出たら生きて帰れるのかわかりなく、家族や本人も不安な思いをしていゝるはずなのに「祝」の一文字が書かれていた。なぜなのか。不思議に思ったので、調べてみた。当時の男の人にとって軍隊に入て国のために戦えることが、喜ばしことなのだという。戦争中は自分一人の命よりも国のために勝つことが大事とされていゝる世の中だ。兵士の無事を祈り贈った千人針を見た。一人一針。自分の家族のほかにも、知り合

や街の人とも協力して縫っていた。戦時中、大変なことがあつても、互いに思いやり、協力をしていたと知り、とても素敵だと思つた。戦争では、原爆・空襲なのでたくさんの方が命を落した。戦争が終わつた後の日本は、大きく変わつていゝた。例えば、「青空教室」。兵士になるためや、兵器をつくるために学校に行くのではなく、民主主義を大切にした教育、義務教育が生まれた。家電では、テレビ・電気冷蔵庫・電気洗濯機は、三種の神器

と呼ばれ人々の生活は豊かになつていった。
 戦争は、単に国と国との争いではない。戦
 争とは、人々の命を粗末にし、苦しめるもの
 だ。だけど、戦争があつたからこそ、平和の
 概念や、現在につながらぬものが生じた。私
 が思う平和とは、人々が自分。他の人の命を
 大切にし、千人針のよりに、お互いに思いや
 り協力をすることだと思ふ。そして、私が今、
 できることは、もう二度戦争が起らないよ
 うにするために、けんかをした時、話し合ひ
 をする時、ぶつかり合うのではなく、思いや
 り、それを忘れず過さぬことだ。

昭和館特別賞

昭和館を訪れて

佐野 環

今年、私は十五歳になりました。戦争当時の実物を見て、今と将来の自分に何かできるのかを考えるため、昭和館を訪れた。

戦争が教しくなり、健康な男性は「赤紙」つまり「臨時召集令状」が渡され、出征となりました。当時渡されていた赤紙を自分の目下見た時、赤茶色の紙が、私の首筋に冷たいものを走らせた。直接受け取った本人たちのことを

を考えてみたが、ありきたりなことしか思い浮かべられなかった。そこで、赤紙の斜め上にある布に目を留めた。それは弾除けと無事を祈って作られた「千人針」だった。戦争中、周りが「お国のために」と言っても、家族は「無事を祈っていたこと、生きていてほしい」という切実な願いをもっていたことが分かった。

次に戦争中の女性たちを映した映像を見た。最初は、かこいと思っていた。しかし、

000006

当時、女性も出征した男性に代わる働き手として、
 域を守る者として生活していたことを知った。
 小さい命を守りながら、重労働、空襲、食料
 不足、戦地の人たちの空否や未来への不安を
 乗り越えてきたのだ。か、こいひんて言葉
 下は表せないくらいに計り知れない強さを持
 っていたと思ひ直した。だが、つらい状況は
 戦後も続いた。生活物質が足りず、栄養失調
 が酷く、まだ何も知らない多くの子どもたち
 が辛い思いをして七くな。た、言葉に表せない
 い程悲しく、悔しかった。戦争でつらい思い
 をした分、生きて楽しい経験もたくさん積ん
 でほしいか、た。子どもは心身ともに、幼く、
 弱いからこそ、も、と守られるべきであつた
 し、未来を一番に担う者でもある分、支援を
 考えるべきだ、たと思ひ。しかし、実際は、
 経済のために朝鮮戦争を選び、経済成長へと
 つなげた。つまり、日本は誰かが苦しんだら
 罪のないう命が消えたりする中、今の日本へと

国を建て直していったのだ。そして同時にその
 の決断をしたからこそ今の私が存在している。
 としても複雑だが、私は多くの人の犠牲の上に
 立っているのだ。だが、私はそんなことも
 気にせず、過ぎているし、これから先、こ
 れらを感じ出したり、考えたりする機会も減
 っていくだろう気がする。だからこそ、覚
 えておくてほしいけれど強く思う。自分、自
 ら、一年一年で変化する物の見方や考え方、
 知識を使って、十六、十七歳でも同じふう
 思いを書き留めていく機会を作ろうと考えた。
 戦後七十五年。これは、戦争を伝えられる
 人はどんどん減っていること、将来私たち
 が戦争の辛さや怖さ、二度と同じことを繰り返
 さないといふ多くの人たちへの意思を伝える
 必要があるといふことだ。体験談を聞ける最
 後の世代として多くのことを学び、吸収し、
 空を見守ってくれているであろう人たちに恥
 じぬよう、自分なりに精一杯生きていきたい。